

(146) 栃木県那須塩原の三斗小屋鉱山

参考文献(1)を手引きに、本鉱山の探査を行った。滅多にないことであるが、1回の探査行で、現地を確認することができた。多数の坑口跡が近接しており、ズリからは本鉱山の主要産出鉱物の標本も容易に採集することができた。鉱山跡には容易にたどり着けよう、危険・危ない箇所は見あたらない阿。なを、文献によれば、本鉱山の登録鉱種は銀、銅、鉛、亜鉛。

本鉱山への経路は次の通りである。東北道を、黒磯板室ICか、那須ICで降り、板室温泉を目指して北西方向に進んでいく。板室温泉に近づいたら、図1に示している様に、深山ダムを目指して北上していく。深山ダムの北端の所で、三斗小屋方面への林道に入っていく。直に橋の上でゲートに出会う。写真1参照。探査日(5月9日)にはゲートは閉まっており、これより先は、一般車通行止めであった。付近は道幅などに結構余裕がある。適当に駐車し、ここから徒歩で進むことになる。

立派な林道を30分程進むと、金山沢出合いにつく。写真2参照。ここから金山沢に入っていく。林道はすぐに消えるが、かまわず進んで行くと、少し先に、砂防ダムがある。写真3参照。これを右から巻き上がる。後は沢を遡っていく。適当な大きさの沢で、特に急でもない。出合いから30分程で、鉱山跡にたどり着けよう。現地で、距離100m程度内に5個から6個の坑口跡、プラトー部、敷き設状態のトロッコ・レール、ズリ跡を確認した。部分的に残雪が残っており、確認できない箇所もあったが。6月以降ならば、残雪も消えている頃だろう。

現地を再訪するならば、ガーミンなどを持参することを勧める。今回辿った経路中には、特に危ない箇所は皆無である。現地で充分気に入るような標本を採集することができよう。ただ、沢には殆ど石英の転石は皆無であった。著者の目が節穴なのかもしれないが。

参考文献(2)には、4行足らずの文章で本鉱山が紹介されている。「・・・鉱床は流紋岩中の鉱脈ないし鉱染鉱床である・・・鉱石は黄銅鉱、黄鉄鉱、石英よりなる。」

探査日 2017年 5月 9日

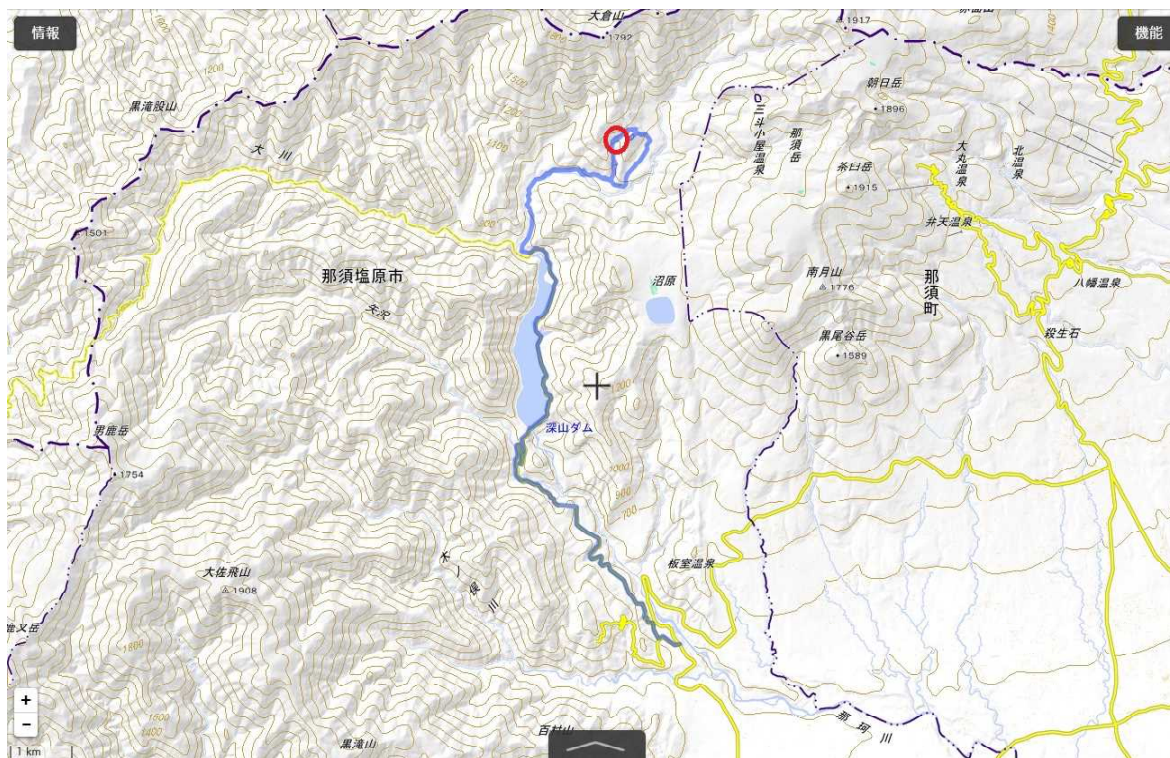


図1 板室温泉付近から、ガーミンで測地した経路を水色の曲線で示している。赤丸が確認した鉱山跡。良く知られている三斗小屋温泉と今回の三斗小屋鉱山の位置は大分離れていることに留意すること。帰路は、板室温泉で湯に浸かるのも良いであろう。 鉱山跡と三斗小屋温泉を結んだ線分中間付近に「三斗小屋宿」がある。鉱山も温泉もこの名を借用したものであろう。「・・・宿」と名がついているからには、人家があり、人が住んでいたと思われるが、ここへの林道がゲートで閉鎖されているので、現在では無人化しているのであろう。

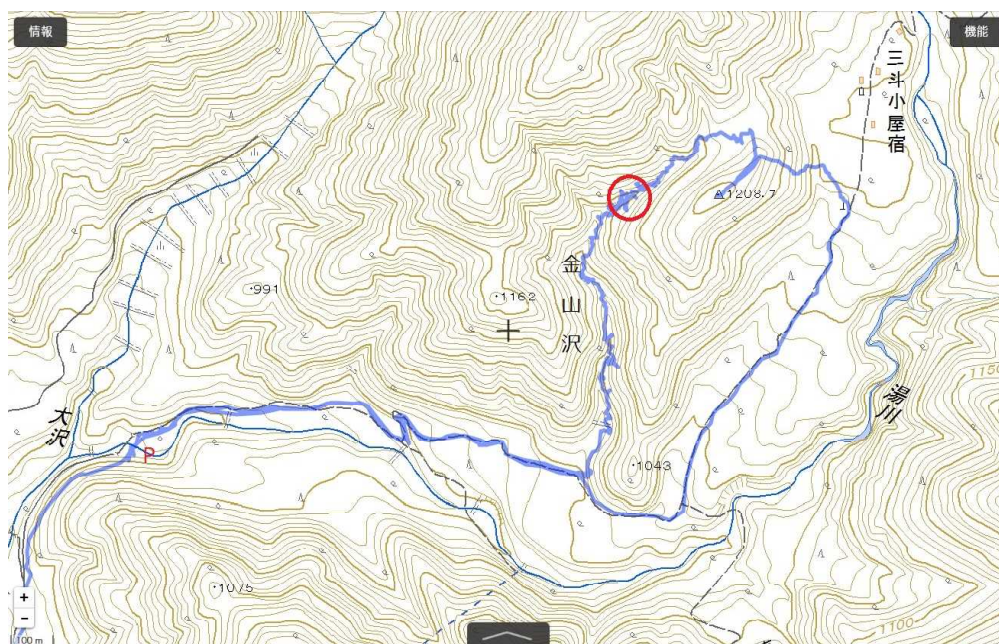


図2 図1の部分拡大図。左下の文字Pは駐車場所。金山沢の上流の所の赤丸が鉱山跡。P点から歩き始め、金山沢を遡り、鉱山跡を確認後、更に沢を遡り、クマザサをかき分けながら、標高1208.7mの三角点まで登り上がった。理由は本文を参照。その後、又クマザサをかき分けて、東側にある林道に降りた。左上の三斗小屋宿当たりまでは、殆ど舗装の行き届いた、立派な林道である。何故通行止めになっているのか？ 近年何故か、ゲートで進入禁止となっている林道が多いように思っている。

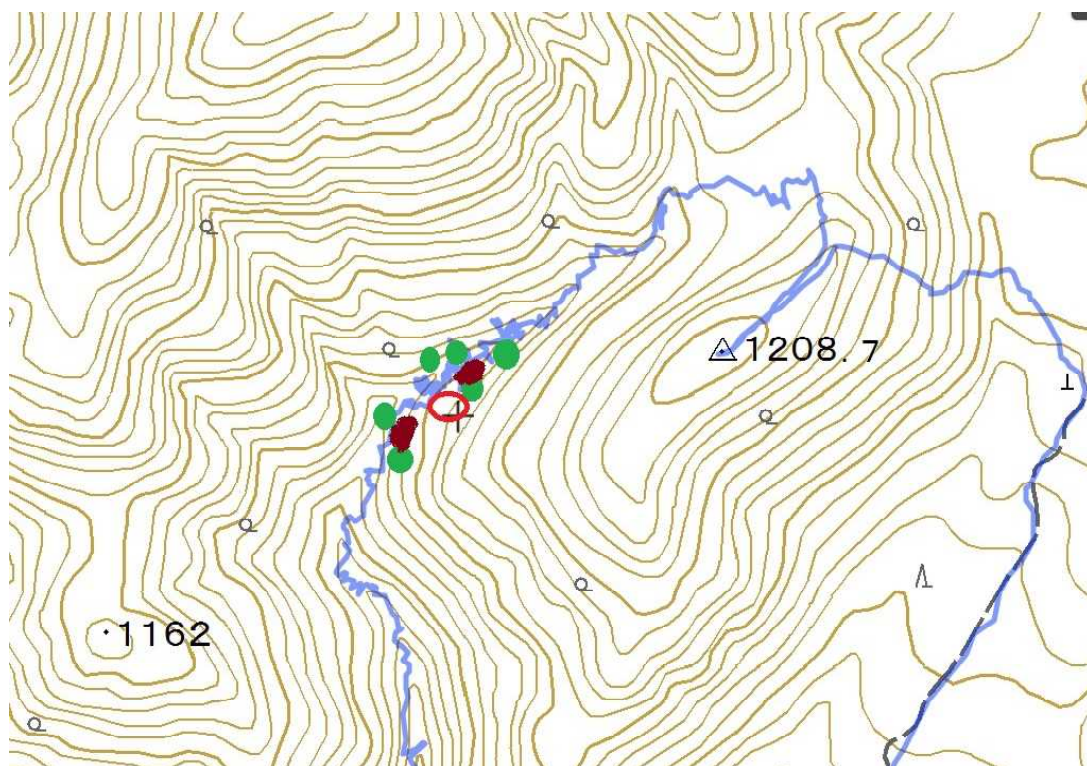


図3 現地付近の拡大図。黄緑丸が坑口跡。茶ベタがズリ跡。赤丸がプラトー部。プラトーより上流には2本の並列したトロッコ・レールが残り、上流部の埋もれた坑口に向かっていて、鉾山跡を確認した後、金山沢を登り上がり、三角点まで登り切った。

鉾山跡写真

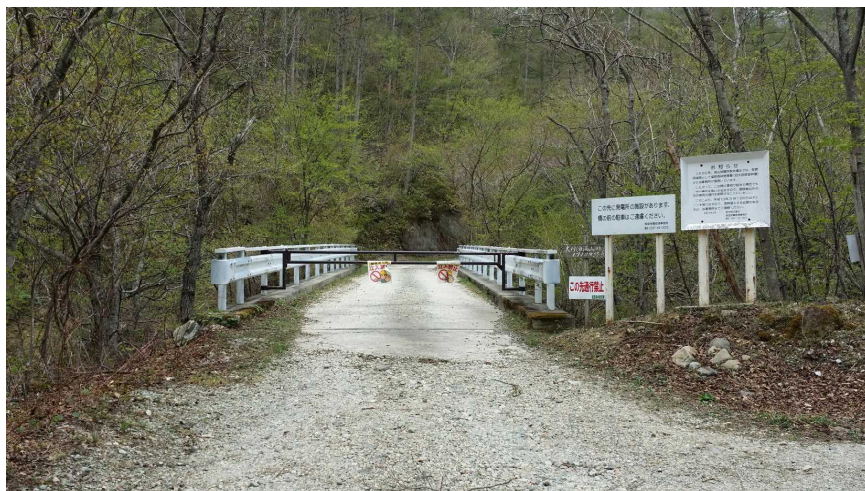


写真1 深山ダムから三斗小屋へ向かって林道を進んできた。橋の上にゲートがあり、これより先閉鎖。この付近結構広いので、駐車可。ここより徒歩。良いハイキングコースでもある。

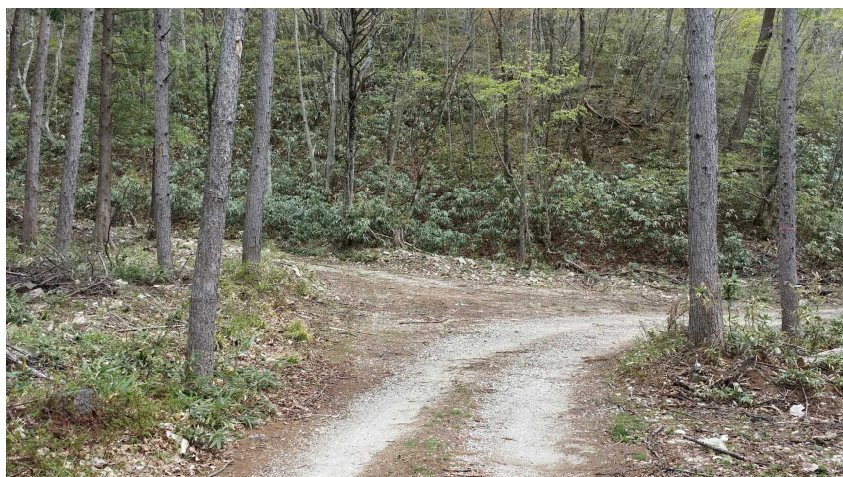


写真2 写真1の所から、三斗小屋宿への林道を進んできた。金山沢出合い付近。見て分かるように立派な車輪の轍跡がある。ここで左側に入っていくが、道は直ぐに無くなる。かまわず進んで行く。



写真3 金山沢にかかっている砂防ダム。地形図に、このダムは記載されている。右側で簡単に巻ける。

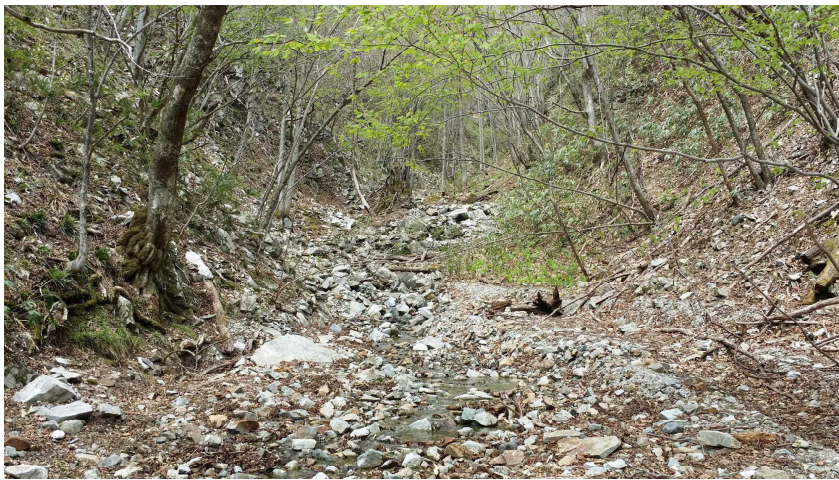


写真4 砂防ダムの上流での金山沢の様子。気持ちよく、軽快に沢登りができる。転石も探せるかも。



写真5 中央部で、笹に隠れている黒い部分が沢の左岸、沢水準当たりで最初に見つけた坑口跡。標高は約1060m。これより上流に沢山の坑口があった。



写真6 写真5に示している坑口の入口付近から内部を覗く。大分奥まで続いている。



写真7 沢の右岸にあった坑口跡。写真5で示している坑口の少し上流。

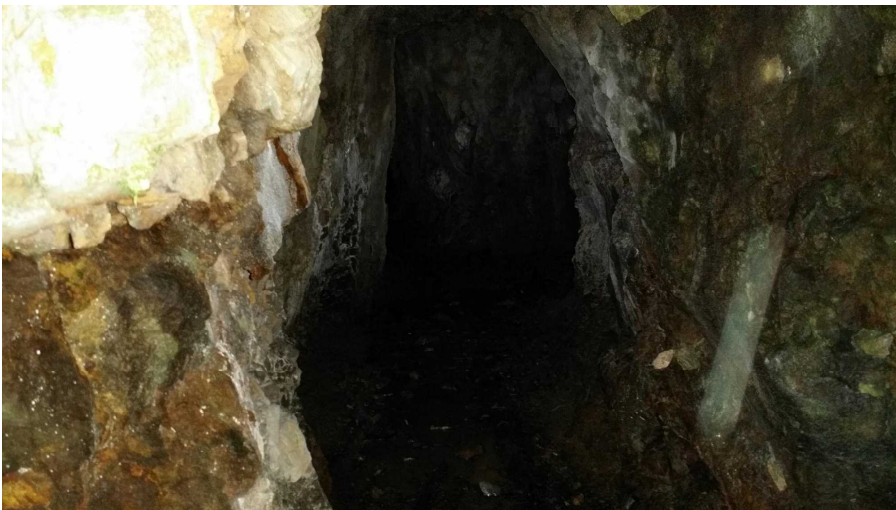


写真8 写真7で示している坑口の入口付近から内部を覗く。下は水没しているが、坑道の高さは結構ある。この坑道も大分奥まで続いている。入口付近の土砂の堆積で、排水が止まっているようである。



写真 9 更に上流の沢の左岸には、プラトー部があった。このプラトー部に立って、上流側を見る。ここより上流に向かって、2本のトロッコ・レールが上流に向かって延びていた。先は土砂で埋まっているが、左岸の坑口に続いている模様。左上の白色部分は残雪。このプラトー部の山側にも残雪が残っていたので、プラトー部の山側の観察はできなかった。



写真 10 レールの先にあった坑口跡。沢の左岸。



写真11 更に少し上流にあった坑口跡。前面に大量の残雪。5月上旬であったが、ここは標高1100m前後。



写真12 写真11で示している残雪を少し登り上がって、坑口内部を撮影した。滅多に見たことがない程大きな坑口であった。中心に坑木1本が残っていた。奥一面に岩石入りの土嚢袋を積み上げて、坑道を閉塞していた。



写真13 写真12で示した坑口前から、沢の下流を見る。写真の中央付近が前述のプラト一部。右岸の沢水準より10m程高いところに、連続した2個の坑口跡を視認はした。視認だけ。登って確かめてはいない。

採集鉱物写真

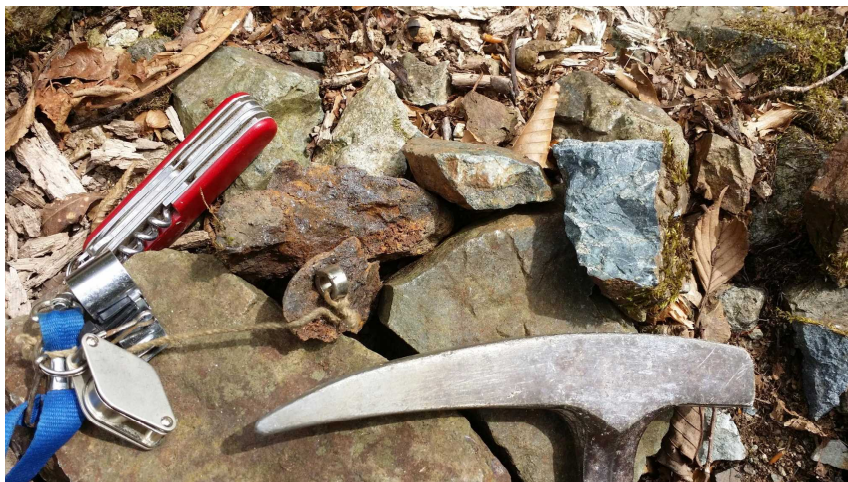


写真14 ズリで、1分もかからないで採集できた標本。ハンマー上の左側上下2つが赤鉄鉱+磁鉄鉱、小さいリング型ネオジウム磁石がひっついている。真ん中上が閃亜鉛鉱、右が細い筋入りの少しリッチな黄鉄鉱。

付記

参考文献の鉱床の項中に、「・・・三角点北方20～30mにある旧1号坑付近・・・」の記述があった。非常に明瞭である。金山沢中での鉱山跡を確認した後、沢を遡り、クマザサを掻き分けて、三角点を目指した。図3中に、その経路が水色線で描かれている。しかし、三角点北側近傍には、全く鉱山跡は視認できなかった。なだらかな山容で、まばらな木立の下に背の低いクマザサが伸びており、見晴らしは結構よかった。帰路は、ここの尾根から又クマザサを掻き分けて、東方向に下り、三斗小屋宿に連なる林道に降り立った。

文献中に坑道位置が明瞭に記述されているのに、何故全くその痕跡を確認できなかったのか、自問自答している。

本稿を書き進めているときに気がついた。三角点から「北」に伸びている尾根は、図3から見とれるように、「北」ではなく「北東」であることに気がついた。三角点近傍にいたときには、尾根は「北」に伸びているものと、早合点をしていたようである。ガーミンでの確認を怠った結果である。

三角点から、「北方20m～30m」は尾根上では無く、山の斜面に当たる。その斜面中に、旧1号坑を確認できるかもしれない。この当たり、道は無く、尾根からずれると、クマザサを掻き分けて進むことになるが。

今回の探査では、参考文献に記されている露頭鉱脈に全く触れていない。坑口とズリの確認だけで済ませている。次回、残雪が消えた頃には、しっかりと露頭鉱脈を観察したいものである。旧1号坑も。

参考文献

- (1)「地下資源調査報告書 第2号」、栃木県、?年。
- (2)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。

追探査記

本文の末尾に書いている「旧1号坑」の確認と、岩友2人に現地の紹介を兼ねて、再探査を行った。結果、沢部には、既報告箇所以上に、坑口跡があること。ズリには、豊富に黄鉄鉱の鉱石があること。そして、三角点から「北西方向」に旧1号坑があることを確認した。旧1号坑跡には、3つの坑口跡、露頭鉱脈、大きなズリ斜面があった。

今回も、金山沢を遡り、鞍部から尾根を経て、三角点に辿り着いた。鞍部では、林の藪の中に、小さな貯鉱場らしい箇所を見つけた。図4参照。三角点から、北の方向に斜面を下り、直ぐに坑口跡を見つけた。旧1号坑の方向は実際には、三角点から北ではなく「北西方向」であった。立派な3つの坑口があり、坑口付近の岩盤は露頭鉱脈であった。坑口跡から斜面下方に、大きなズリも確認できた。ズリを探せば、良品の標本を容易に採集できよう。

旧1号坑跡を確認後、「三斗小屋宿」の確認と、その北にあったらしい「金鉱山跡」の目星をつけるために、鞍部から東方向に下り、三斗小屋宿跡に辿り着いた。

探査日 2017年6月11日

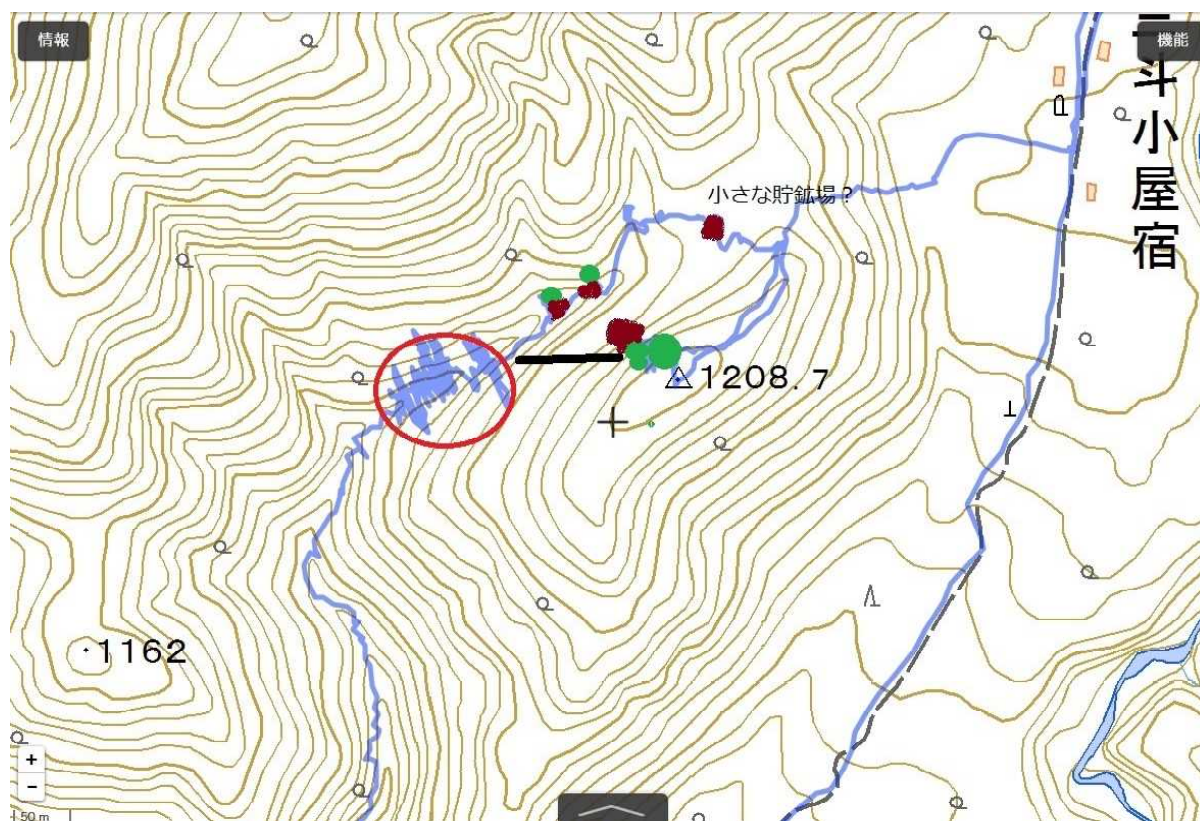


図4 中央の赤丸部分の詳細は図3を参照のこと。黄緑丸は坑口跡。三角点近傍の坑口跡が旧1号鉱跡。茶色はズリ跡。結果論であるが、沢の鉱山跡から旧1号坑跡への経路として、図中に描いた黒線分のショートカットがありそうである。但し、斜面は少し急であり、クマザサが生い茂っているので、1人ではきついかもしれない。著者の辿った経路でも、沢部と尾根部以外の箇所はクマザサを掻き分けて進んでいる。鉋やノコギリを持参するのが良いであろう。この当たり、クマザサの中ではガーミンがないと確実に方向音痴となろう。やはりガーミンを頼りにすると良い。なを、尾根、及び三角点あたりはクマザサはあっても背丈は低いので、歩きやすいが、立木が取り囲んでいるので、見晴らしはあまり良くはない。



写真15 クマザサの藪こぎが終わったあたりで、大部分が腐植土、枯れ葉で覆われていた、小さい貯鉱場であつたらしい場所を見つけた。適当に石を拾い、ハンマーで割ると、黄鉄鉱に富んだ破断面が現れた。この付近に、旧1号坑の存在を確信した。



写真16 旧1号坑であろう坑口の一つ。この付近に坑口跡が少なくとも3つあった。中央の薄茶色部分が露頭鉱脈部分。昼食を取るのに適当な広さのテラスもある。

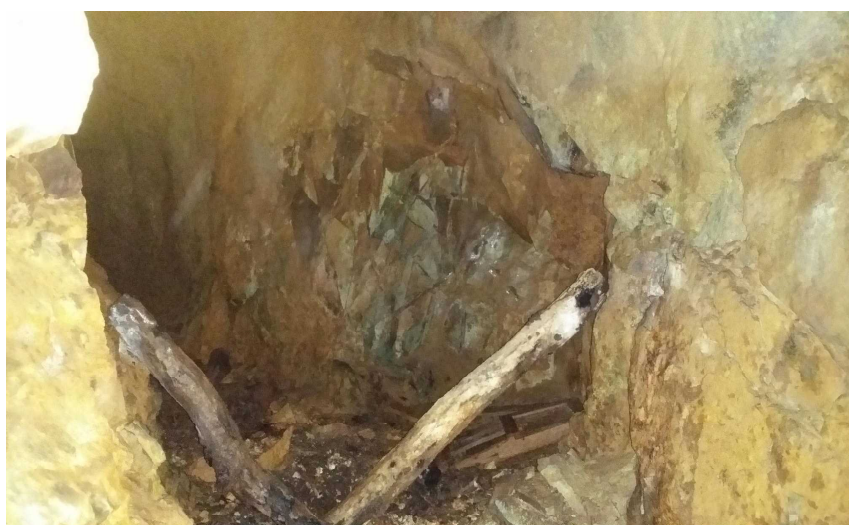


写真17 入口から覗いた坑口内部。坑道は左側に伸びていた。



写真 1 8 坑口跡から斜面
下方を見る。前方が北西方向。
一面ズリである。



写真 1 9 三斗小屋宿を目
指して、尾根の鞍部からクマザ
サの藪こぎをして下った先にあ
った「宿の記念広場」らしい広
い空き地。前方の林の手前に、
左右に綺麗な林道がある。左を
進んで行くと三斗小屋温泉に辿
り着く。住居は全くないが、毎
年手入れをしているのであろう、
草木は 1 年草だけである。

付記

三斗小屋宿の林道を上流に進んで行った先には、三斗小屋温泉への指導標があり、その林道の終点付近に多数の車が駐車していた。温泉関係の人の車であろうか。これより先は登山道である。なお、一般車は、図 2 中の P 点、写真 1 で示しているゲートより先には進入禁止である。

三斗小屋温泉は、秘境温泉として知られており、一般には、那須岳の北側の峠を利用して、辿り着く。が、今回辿った林道を一般車が通行できるようになれば、非常に容易に、三斗小屋温泉にたどり着けると思う。温泉を目指す観光客が増えると思うが。ゲートから林道終点までは、非常に立派な林道なのだが、何故閉鎖しているのだろうか？